

目的 古くから人形は信仰・呪術・鑑賞用・愛玩用等の目的のため、人間の雛形として作られている。これらは各々形体、大きさ、材質が異なり、その呼称、作り方もさまざまである。人形の衣裳は、人形本体に直接插画、着色したもの、紙や布等で別に誂え、それを人形に着せるものがある。

本報告は代々毛利家に残されてきた江戸末期から明治前期頃の日本人形の衣裳のうち、裸人形、抱き人形に用いられた種々の着せ替え用の衣裳について、その材質、文様等を調査し、当時武家で着用したものとの類似性を検討したものである。

方法 山口県の毛利博物館に所蔵されている人形の衣裳を資料とした。しかし残念ながら人形本体は一体も残存していない。

結果 毛利博物館には毛利家に代々受け継がれてきた江戸時代の雛人形が何組かあるが、その中には三つ葉葵の紋の入った内重雛がある。かつてはこれらの雛壇に加えられたであろうと思われる人形達の衣裳が単衣、袷、大、小類似のものを含め50数点ある。それらは振袖、小袖、羽織、袴、紋服、帯等であり、その材質は輪子、縮緬が多くその他麻、芭蕉布、お召等もある。文様は草花文様が主で、吉祥文様等でそれらの多くは、染めや刺繍で、また、縞柄もある。帯は緞子、厚板等である。表地は人形用の生地や残り布を利用しているが、紋服は表裏共新しい布である。縫製は袷の場合比翼仕立で、袖口綿、裾綿が入っている。小児型のものには肩・腰あげがある。また、飾紐もついている。